

ハルヒの力が無くなったという知らせを、あの3人が三様に告げに来た日の翌朝。

夢にしがみつくように頑固に眠っていたおれを起こしたのは、いつもの妹のボディ・プレスだった。

いつも通りの、いつもの朝。

違っていたのは、それに続くセリフがなくて、妹がそのままベッドの脇に立ち尽していたことだった。

「……」

「ん、どうした？」

「あ、うん、古泉君が来てよ。……キョン君を呼んで欲しいって」

「そうか……」

用件は分かってる。

「キョン君！」

「ん？」

「あ……な、なんでもない。ごめんなさい」

おれはぼんぼんと、手のひらで妹の頭を軽く叩いた。

「ちょっと、出掛けて来る。昼飯には帰るから」

「うん。……いってらっしゃい」

そうとも、用件なら分かってる。

「悪い。待たせたな」

「いえ、こちらこそ早朝に押しかけて申し訳ありません。あまり……」

「時間がありません……か？」

「ええ。本来なら決闘のひとつも申し込むところですが」

「ことわる」

「ぼくも……その方が助かります。実は暇請いに来たような訳でして……最後に、一発、殴らせてくれませんか？」

「どこを殴りたいのか分からんが、おれの腹か頭に穴でもあけようっていうのか？」

「僕達の持っていた力のことでしたら、もう……。もちろん、素手で、ですよ」

「……本当に終わったのか？」

「ええ」

「最後って言ったのか？」

「ええ、最後です」

「変更するなんてことは？」

「ありません」

「おまえの後に、まだ二人、控えてるんだぞ」

「彼女たちが、あなたを殴る理由なんてありませんよ」

「おまえには理由がある。だが、聞かないでくれっていうんだな？」

「助かります」

「ふう……。せめて、公園にしないか？ いくらなんでも、自宅の前じゃな」

「ええ。少し歩きますか。話をしてもかまいませんか？」

「ああ、最後なんだろう？」

「この期に及んでも、お話できないことのほうが多いのですが……。それに、こんな時はかえって、言葉に詰まりますね」

「……」

「涼宮さんを……ハルヒさんを、どうかよろしくお願いします」

「……古泉、おれは……」

「……」

「……おれは神様じゃないぞ」

「ええ」

「それからハルヒ、あいつもだ」

「はい。……人が敬意を捧げる対象が、人であっても構わないでしょう？」

「どうしても、行かなきゃならないのか？」

「それがはじめからの……そう、取り決めのようなものでして……。あなたがたの前に現れたことと『組み』になっているんです、ぼくたちの退場は」

「ハルヒなら……あのハルヒだったら、時間を止めてでも阻止したろうな」

「ええ、それも楽しかった。しかし、あなたが今、釘を刺してくれましたよ。彼女は神様じゃない、

と、……好きでした、彼女も、あなたがたも……」

「古泉……」

「長門さんをお願いしたんですが、はっきりしないのです。ぼくたちがいなくなった後、ぼくらについての記憶を、あなたがたから消していただけるのかどうか、……彼女は首を振ってくれませんでした。縦にも、横にも」

「……迷ってるんだ、あいつ、……喜んでいいことだよな？」

「多分、……いえ、今はそう思います」

「さあ、ついたぞ、古泉、時間がないと言ったよな、あっさり、やってくれ」

「最後にひとつだけ、目を閉じていただけませんか？ さすがにあなたと目を合わせたままでは、どうも……」

「閉じる方は、怖さ倍増だぞ、いつ来るのか分からない痛みなんてのは……。なぐる時は何か言っただけからにしてくれ、“チアーズ”でも、何かそういうのを、……何だっけいい、……古泉？……古泉！」

こうなることを、どこかで予期していた、そんな気がした。

目を開けると、前に居たのは長門だった。

「長門！古泉は！？」

「去った」

「いままで、ここに居たんだ！」

「私が移送した」

「長門？」

「そう約束した」

「おまえが？」

「そう」

「……あいつ」

「古泉一樹は、あなたたちの記憶を保持する方を選択した」

「……ちょっと待て！」

もう少しでつながりそうな何かが、おれにそう叫ばせた。

何故、それは「選択」なのか？

そもそも、どうしてそんな「選択」が可能なのか？

「長門、答えられないなら、そう言ってくれ、……あいつの、古泉の記憶は、おまえが守るのか？」

時間にすると1秒にも満たない躊躇があった。

長門は答えを言った。

「そう、約束した」

「……たとえば、あいつが言うところの『機関』とやらが、古泉がそんな記憶を持ってるのは不都合だなんだと言ってきても、あいつの存在ごとおれたちの記憶を消し去ろうとしても、長門、おまえが守ってくれるんだな？」

「約束した」

「だったら、ひとつだけ頼んでもいいか、……いつのまにかおれたちの記憶がすりかえられたり、薄められたり、ブロックされたりしても、おれたちがそのことに気付きもしないとしても、いつか、何年先になるかわからないが、おまえたちともう一度会って、その時、何かが邪魔をして、おまえたちのことが思いだせないようなことがあったら、長門、頼む、おれたちに『思い出せ』と言ってくれ」

長門は、いつかのように答えをくれた。

「……大丈夫、私がさせない」

「キョン！！」

ハルヒは、公園に一人残ったおれを見つけると、強烈な体当たりをくらわし、そして何度も、こぶしでおれの胸を打った。

「あたしのところには、みくるちゃん came たわ、有希とは、ゆうべ一晩中、いっしょだった」

「……そうか」

「こんなのってないわ！ 今はしかたがないことかもしれないけど……」

「……ハルヒ」

「……いつか、そのどうしようもない都合を残らずひっくり返して、キョン、みんなをつれ戻しに行くからね！ だって、誰一人欠けたって、SOS団じゃないもの！ ……だから、だから、そのときまで……」

ハルヒの頭を、おれの胸に押しつける。その思いごと。

「ああ、約束する。そのときまでだって、その先だって、ずっとだ。あいつらが見つかったら、誰一人欠けたって、SOS団じゃないんだろ？」

「そ、そうよ！」

「だから、ハルヒ、おまえも……」

「たとえ何があったって、あんたを放り出したり、置き去りになんかしないわ！ だって！ だって……」

そして、おれたちは唇で約束を交わした。